故佐脇貫一氏の生涯

市野瀬　仁
（会員　佐伯市長島町）

佐脇貫一氏は平成九年七月十六日、八十九歳で逝去されました。金色に輝く善教寺の本堂で静かな葬儀が行われました。佐伯史談会からは矢野彌生会長の弔電がありましたが、参列者は私一人でした。すでに故人を知っている史談会員も少なくなりました。

式終了後、遺影の前に、一人立ちすくむと眼鏡の奥底から、知的なマナコが輝き、ぐっと結んだ口元からは、本格派の郷土史家の気迫が迫ってきます。

二週間ほど過ぎて落ち着いた頃、奥さんの話を聞きますと、心臓病と眼病のため十年間程臥した間、史談会員で親しかった清田・高木・羽柴・富沢・汐月・山本諸先生のお見舞をいただいたと涙ながらにお礼を申していました。この方々の中には既に亡くなった方がいらっしゃいますが、故人は余程生命力があったのでしょう、苦痛もなく長く生きながらえました。

寝ていても、あっちこっちから昔の話を聞きに来る人があったことも、本人を元気づけたものと思います。私もやるだけのことを無理を知りつつ勤めました。すると「おおきに」と言って南無阿弥陀仏と唱えていました。そのお陰でしょうか、日頃から尊敬していた八幡宮司の故疋田泉先生が正装してその後に、私の父も羽織袴の礼装で立ち、その後に主人が背廣姿でよい所に行く夢を見たのです。私はこれで願いがかなったものと喜んでいます。

故人は長男として、好きな本を思うように取りよせ、読んだり書いたり、調査に行ったりして通した一生でした、と話していた。

佐脇家の墓地は鶴城高校の第二グラウンドの横を、招魂所に向う鉄道線路の手前に、小溝をはさんで柳桜の大木があり、その少し手前の小溝を渡ると黒い墓が立っています。それが、「佐脇家累代之墓」で、墓石の左側面に佐脇進　昭和五十三年建立とあり貫一の名前はありま

せん。進は長男で福岡市で医院開業中病死された方です。

佐脇家墓地の後横に、佐藤佑一家の墓地があり、郷土史家佐藤蔵太郎即ち「鶴谷外史之墓」昭和四十七年佐藤佑一之建とあり、宝輪の石塔が建っています。

佐脇家(右の黒石)
佐藤佑一家(左の五輪)の墓地

佐脇氏は終生「鶴谷」を師と仰ぎ、弟子と自負した方でした。師の傍らで永遠の眠りについておられる光景はこの上ない幸せな方だと思います。苦楽を共にした奥さんが夢の中で、私の願いがかなってよい所に行ったと話されたのは、この永遠の地だったのでしょう。

一、佐藤蔵太郎との出合い

私(佐脇氏)が鶴谷翁を訪ねて、佐伯の話を聞き、郷土史に興味を持つようになったのは、昭和のはじめであった。そのころ先夫人、おこと小母さんを亡くされた翁は、独り住まいの淋しさを酒と著述でまぎらしていた。

それだけに、若い私の訪れを喜び、私を相手に、翁は冷たい佐伯人の態度を非難した。また矢野竜渓や藤田鳴鶴が佐伯人にどのように扱われたか、明治・大正の政界人と佐伯の関係など、体験を通じて知った佐伯人根性と時代相を、つぶさに語ってくれた。(中略)

また、ある日、翁の書斎で話こんでいたとき、「郵便」という声、玄関に出ていったおまち小母さんは、一通の親書を翁に渡した。封筒の文字を見た翁は突然「犬養からじゃ」と叫んで封を切り、長々と巻紙に書かれた便りをむさぼるように読んだ。そしてハラハラと涙をこぼしながら「宰相にもなろうかという犬養が、故郷に逼塞している昔の友を忘れずに、よくも便りをくれたものだ」と感激していた。

そのころ、私はよく翁のお供をして、津久見、丹賀などに行った。(中略)

昭和六年のある日、翁は私の前に一冊の写本を置いた。『栂牟礼実録』とある。歴史に興味を持っていたが、郷土史の何んたるかを適確につかんでいなかった私には

『栂牟礼実録』の価値はわからなかったが、それが唯一の佐伯氏の伝承であることを聞くと、これを写し取りたいという欲望にかられた。私はその写本を借り出して、友人の大亀忠君に相談した。そして翌七年七月、ガリ版刷りの『栂牟礼実録』が、大亀君の睦美書房から出版された。（奇しくも大亀忠は私の従姉のしのぶが妻であって、いつの日か佐脇氏はその本を私にくれた。私も驚いたが、佐脇氏はその関係を知るよしもなかった。）

翁は明治十四年九月、竜渓矢野文雄先生の知遇をうけて東京に伴われ、郵便報知新聞に入社したが、翁の新聞生活はここにはじまり、大正元年郷里佐伯に帰って、専心郷土史料の筆をとるようになるまで、約三十年間続いた。

（昭和四十八年・佐伯史談一一三号　随想「佐藤鶴谷翁と私」会員：佐脇貫一）

こうして氏は佐伯第一の郷土史家として語り部の役を持つ唯一人となった。

二、略歴と人柄

昭和二年、佐伯中学校十三回生、下堅田津志河内、同級生に元市長池田利明、医師土屋六衛、歯科医花井芳郎等がいます。

佐伯中学校卒業後、歴史の教師たらんと東京の大学に合格したので、両親は上京してたしかめたが、長男であり、商家の跡継ぎにするため入学を許可しなかった。それがおさまらず、朝鮮に渡ったり各地を歩きブランクがあったようである。

・福岡相互銀行勤務も一時期あったが長く続かなかった。

・〇〇年、毎日新聞社に入社して、大分・宮崎の地方版の編集記者となる。

・昭和十九年頃、門司・大分で空襲に遭い、仕事もままならず、毎日新聞を退社。

・昭和二十一年春、佐伯に引き揚ぐ。

・昭和二十二年、友人たちと佐伯市内で地方新聞を発行したが、数年後廃刊となる。その後、宮崎市と大分市に流寓じて新聞記者を続ける。

・昭和三十三年八月、鶴岡郷土史研究会（佐伯史談会前身）の堅田郷土史蹟めぐりに初参加。

・昭和三十五年頃、週刊ポケットの委託記者として五十

八年まで執筆を続けた。

・昭和四十一年、「佐伯史談」初投稿。

・昭和四十六年～四十九年、『佐伯市史』編さん事務局嘱託となる。

・昭和五十一年、福岡市にて長男佐脇進医師と同居。

・昭和五十七年、進医師逝去のため佐伯市に帰郷。

新聞人としては地味な方で、近所つき合いをはじめ人との交際も狭く話しかけられると応答はするが、本人から話しかけたことは一度もなく、また見たこともない方であった。だから、ユーモアや冗談があるではなし、孤独な人に見えた。しかし一旦質問でもすると、小声で話しだし、その深さ、廣さに圧倒されたものである。

羽柴先生が生前私に、「佐脇さんに質問して即答できなかったことは一回だけだった」。これが、四年間佐伯市史編さんを共にした先生の弁である。私が佐脇氏に終生引かれて訪問したのも、その故であった。まさに佐伯地方史の生き地引きであったと思う。

氏は、近視眼がひどかったのか、気が向かなかったのか、佐伯史談会の旅行にもあまり同行しなかったようで、まさに三猿子の自称はむべなるかなと申し上げて憚らない。

されば鶴谷は別として、佐伯地方で文筆をもって生涯を貫いた郷土史家は佐脇氏を除いて私は知らない。まことに貴重な存在であったと思う。ただ残念なことに氏の著書として世に出た本のないことは、数が多いだけに心苦しく思っている。とくに「佐伯地方の姓氏」は昭和五十五年(一一二号)から昭和六十年(一三八号)の五年間の力作が佐伯史談に発表されているが、このタイトルと言い、内容と言い、時代にマッチしていて名著に値するものと私は確信している。

佐伯地方の読者のみならず、どこの地域の人にも役立ち、興味をそそる書物として、一位に推薦したい。高年令になられて氏の本領はここに行きついたと申してよいのではないか。そこで、何らかの方法により単行本として世に出してあげたいと思う。

三、業　績

(一)　週刊ポケット(地方新聞)での郷土史研究録

左にその例をあげると、

(一)　お満勢さま物語

（昭和44・1・12～44・2・23）　7回

㈡ 栂牟礼恩怨録（昭和44・3・2～不明）

㈢ 今は昔あれこれ

（昭和44・11・9～47・10・22）　149回

㈣ 物語毛利高政伝（昭和46・7・4まで）　71回

㈤ 史伝源林公高慶

（昭和46・7・11～47・9・3）　57回

㈥ 佐伯太郎惟定伝（昭和47・9・10～）

㈦ 佐伯霊跡案内記（昭和48・10～49・6・30）　38回

㈧ 佐伯新地名考（昭和48・11～）

㈨ 佐伯繁盛記（昭和49・7・7～昭和53）

㈩ 番匠物語　（昭和54・10～昭和56・3・22）　68回

㈠㈠ 日豊海岸散歩（昭和55～）

㈠㈡ あの寺この庵歴史散歩（昭和56・3・29～）

（主宰　高司良雄提供）

右の外に、佐伯史談に投稿したものを整理してみると、その数、知らずの感がある。

㈡　「佐伯史談」に発表した主な研究主題

昭和四十一年、五十八歳のとき初投稿して以来、昭和六十年七十七歳まで続けた。氏の研究タイトルを見ると、佐伯氏十七回（内人物九）・神社（八）・大神氏㈥・古代海部（六）・毛利氏（五）（以下省略）となっている。それは次の人物を追究するのが目的であったと思う。

神護景雲元年（七六七）

佐伯宿弥久良磨豊後守に任ぜらる

延暦　三年（七八四）　海部郡大領外従六位海部常山外従五位となる。

仁和　二年（八八六）　大神朝臣良臣豊後介となる。

天慶　四年（九四一）　藤原純友の次将佐伯是本海部郡佐伯院を襲い一時占拠する。

㈢　宝剣山は古墳であると推論し、後認定さる

昭和四十四年二月八日、佐伯史談会員二十名ばかりで渡町から女島、長島を巡った。その際、佐脇会員によって宝剣山は古墳であると推論された。理由は六点あった。それは

一、直径凡そ八米、ほぼ完全な円形の盛り上げた形（円墳）である。

二、古くから語りつがれ、佐藤鶴谷も裏付けている。

三、石郭（石棺）に用いたと思われる扁平な板石（頁岩（けつがん））が六板、祠の屋根等に使われている。（以下省略）

地元の人も二人見えて参考になる話を聞き、朝日新聞外二社も参加して、二月十日再度入念に検討した結果であった。二月十五日、佐脇氏と二人で佐伯市教育委員会に報告した。（以上幹事、羽柴弘）（佐伯史談四十九号）

かくて、佐伯市教育委員会と県社会教育課の元に、昭和五十三年五月二十六日から七月十日まで、長島土地区画事業の施行に先立ち、宝剣山古墳の発掘が行われて、箱式石棺を主体とする盛土古墳と認定されたのである。

㈣　佐伯市史編さんの中心的存在となる

佐伯市は昭和四十六年、市制三十周年記念事業の一環として、『佐伯市史』の編さんを企画した。池田市長は佐伯市教育委員会を通して、編さん委員十二名に委嘱状を交付した。この十二名の内十名が史談会員でその中から、羽柴弘、佐脇貫一の二人が専門委員として、前教育委員会（現、城下西四―三八　阿南顕所有地）の二階で専業したのである。

編さん委員の一人であった私は、完成の期間までの見聞によりおよその輪郭を掴むことができたが、氏の存在があってこそ現在の市史があることを痛感しているものである。何故ならば、主要な部分は氏が執筆か、修正・補足して成ったという事実である。

それは氏が生粋の佐伯人であり、先輩の言動を身につけており、新聞人として長年の経験を生かしたこと。さらに驚嘆に値することは、古典的文献にも十分精通していた事実を、膨大且つ難解な書物を見て知ることができたからである。それは何の縁か四十日間、氏の蔵書を私の家に保管していた関係で調査してみて分かった。

㈤　佐伯市立図書館に蔵書を寄贈

佐伯史談第一七九号の中『四十周年記念特集の部』の佐伯史談会四十年の歩みの㈢に、年表補記として、平成九年の箇所で、故佐脇貫一、佐伯図書館に書籍寄贈と記載したので、重複をさけることにする。

以下若干の写真をご覧になり合わせ考えて、佐伯史談会員としての故佐脇貫一氏の業績を理解していただければありがたいと思う次第である。

（佐脇氏の蔵書から）

・神社

昭和四十六・八・一四、孫佐脇寛産土神也として福岡県(45社)、宮崎県(7)、熊本県(4)、伊豫(1)、中央(5)、佐伯(8)、大分県(7)の主要神社を奉納した記念のお礼が綴られている。旅の少なかった氏にこれほどのエネルギーを知って敬服の至り。中央の男山八幡宮には昭和五十一年六月吉日参とある。

「氏の特徴は余程のものでないと書物に朱線、傍線を入れず書物がきれいです。」が古代・中世と左の歎異抄はその限りにあらず。

・佛教

宗教書の中に親鸞上人に関する歎異抄の半分位を紹介しましたが、文庫本を開いてみると、朱線が入念に引かれているのに驚く。くりかえし、くりかえし読み、没入した姿がうかがえる。目に見えないものを静かに内に蓄えていたのである。

図書館に寄贈した書籍

会員研究発表会のお知らせ

日　時　7月18日(日)13：30～15：30

会　場　佐伯図書館

発表者

(1) 私の戦中回顧

染　矢　　巌

(2) 漢字文の解読について

木　許　　博